

# 合同出版記念会の記

於アルカディア市ヶ谷（令和6年12月1日）

## 奥村晃作歌集『蜘蛛の歌』

奥村晃作の第十九歌集。

三百五十三首が収録された本書では、奥村の名刺代りでもある「ただごと歌」の数々を変わらずに楽しむことができる。また、場所も世代も問わず歌人と交流し互いを高めようとする奥村の貪欲さを、取り上げられた題材から読み取ることができる。

奥村は、本書を「最終歌集」と位置付けている。コロナ禍、そして自身の老いを実感し、後半にかけて奥村の死生観が揺らいでいく様を読者は感じる。ことができるが、むしろその揺らぎを持って奥村の歌はさらに読者を惹きつける。我々読者にとって本書は、第二十歌集を待つ「最新歌集」なのだ。

（宮 梓一）  
「人生、百年」と言われているが身めぐりに百歳の人見た事がない

\*

## 門倉みつ子歌文集『十二夜の月』

二〇一二年から二〇二三年の十年余りの歌とエッセイ八編を納めた第二歌集である。歌集名は「霜降の夕べの空に光り初む檜田球の十二夜の月」という月を詠んだ歌から高野公彦氏が名づけた。

米寿を迎えた作者だが老いと向き合いながらユーモアで乗り越えていく生き方が詠まれていて、その明るさに救われる。歌文集という珍しい形でまとめられていて、作者の故郷下妻の自然、お父様の教養者としての生き方、温かい人柄が伝わって来る。自然と関わって穏やかに暮らしている作者に通じるものがあると思つた。五十年連れ添ったご主人を亡くす悲しみも思い出を大切にして前向きに生きている作者である。

（森田 卓子）  
負ふがに夫の形見のリユック背負ふ  
「同行二人」などと言ひつ

\*

## 稲場洋子歌集『居間の円卓』

札幌在住の著者の第一歌集。コスモスに入会されたのは六十二歳の時、ご夫君が逝去された数年経た頃である。その後現在まで十年余りの間に詠まれた四二一首が後藤美子氏の選により収められている。穏やかな銜のない言葉で綴られたこの歌集に人も物も包みこむ日だまりのような印象を受けた。入会後まもなくお母様を亡くされたが、人々との別れも抑制の効いた表現で思いの深さが伝わってくる。しばしば登場する食べ物の歌はいきいきとした魅力がある。また、新しいパートナーへの思いも瑞々しい。題名にもなった一首の（短歌詠む読む）のフレーズは、読者までも短歌の世界へ明るく誘ってくれるようだ。

（勝木ひさ子）  
飯を食ふ酒を嗜む茶に憩ふ短歌詠む読む居間の円卓

\*

## 大松達知歌集『ばんじろう』

二〇一七年から二〇二二年までに発表された作品を中心に五九七首が収められた第六歌集。父の大病と逝去を経験し、自身も五十代となった心身を見つめ、命や死について考えた歌がとくに印象的で

あつた。

また、家族や生徒を思う心情の深い歌、幅広い視点から現代の社会を捉えた歌、言葉や文化に対する高い関心のあらわれた歌、人間の心理を繊細に描いた歌など、内容が多様で豊かな点、そして、肩の力を抜いてさらっと詠んでいるように見えて、実は奥の深いテーマに迫っている点にも注目した。

どの歌にも作者らしさがいきいきと感じられる歌集である。(伊沢 玲)

一生をかけてわが身を申うにあらんし  
ばしば餃子を食べつて

### \* 今井聡評論集『ただごと歌百十首』

奥村晃作の第一歌集『三齡幼虫』から最終歌集と銘打たれた第十九歌集『蜘蛛の歌』までの十九冊の歌集から百十首を取り上げた評論集。初期、中期、後期と歌集を分類して現代ただごと歌の核心に迫る一冊。現代ただごと歌を「情」、「ころ」というキーワードによって一首ずつ読みといている。歌の技法にとどまらず、取り上げられた歌にまつわるエピソードが書かれている。これは奥村晃作の弟子である今井聡だからこそ書くことのでき

ることで、歌をそのまま読むだけでは知ることのできない奥行きを得ることができ

る。取り上げられた歌は、今井の評により新たな魅力を得ており、存分に奥村晃作の歌を味わえる。(松下 誠一)

論作両輪を努めてきたが結局は歌だ  
歌だ歌人は歌だ 『蜘蛛の歌』

### \* 斎藤嶺也歌集『石狩川水流』

一九九六年から二〇二三年まで、二八年間の五二四首を収めた第一歌集。

作者は旭川市内に在住。北海道の大自然の中での四季折々の暮らしの歌に深い味わいがある。作歌を始めたのは一九九五年。その二年後、肺結核で半年間の入院を余儀なくされた。掲載歌は療養時に病院の裏を流れる石狩川を詠んだ歌であり、「人生の再出発の機会に、自由で力強くありたい」と歌集名を採った。

長年、真摯に取り組んできた農作業の具体的な姿が雄々しく詠われている。また身近な動植物を視る眼は温かく、共存している世界が窺える。一方、厳寒の北国における雪に纏わる歌は鮮烈であり、魅力的である。(四野宮和之)

しづき上げ怒濤のごとく瀨を下る疲れ

を知らぬ石狩川水流

### \* 関 裕子歌集『君は明日も』

中学校教員を定年退職するまでの十年余りとその後、非常勤教員として勤めを続ける計十二年間の歌を収めた第一歌集。コロナ禍という未曾有の事態も含め教育現場が抱える多様な問題に真摯に向き合いながら、未来に続く「今」を希望をもって大切に生きている作者の慈しみに満ちた前向きな姿勢と、そういう作者の土壌たる愛情深い家庭の様子が、歌集の多くを占める職場詠、家族詠を通してストレートに伝わってくる。その一方で、諧謔的な自画像詠や「ささくれ」に「過去のしくじり」を、「苛立ち」に「脳内にしきりに吠える犬」を感受するような独自の感性が光る作品もあり、作風の柔軟な広がりを感ぜさせた。(橋本のりこ)

君はこんな顔だったんだ出会いからマ  
スクの顔しか知らなかったね

### \* 高野公彦評論集『歌の魅力の源泉を汲む』

総合誌、新聞、結社誌、歌集解説等に寄せた各歌人論を、津金規雄の編集により一冊にまとめたもの。三部構成であり、

子規、牧水、茂吉から、水原、小島ゆかり、坂井までの十八人を取り上げる。近現代の優れた歌を鑑賞しつつ、高野の言葉で「月並を排した子規」や「愛誦性のある牧水」、「塚本・岡井・寺山の前衛短歌の印象」等が語られている。また、河野、栗木ら多くの歌人の出発に立ち会い、歌のみならず作者の人となりも紹介しており、高野との出会いやエピソードなど興味深い。

(大西 淳子)

牧水の歌にはゆたかな愛誦性がある。

覚えやすく口ずさみやすいのだ。

①分かりやすい。②内容が感傷的。

③快いリズムがある。私はこれが、愛誦性を生む三要素だと考へてゐる。

\*

### 早川晃央歌集『こいつら』

読後にさわやかな気分になった。歌集の内容がすとんと腑に落ちた。その理由として、まず歌が簡潔であることを挙げたい。推敲し過ぎてつい歌にいろいろと修飾をしてしまうことがある。説明的になったら短歌は台無しだ。それを体現した「潔い」歌が多い。

二つ目は固有名詞の力。「牛めし」、「Maxとき」、「有馬記念」といった力

のある固有名詞を用いることで、修飾語を減らすことに成功している。「Maxとき」と「時」のように、音の繰り返し返しが素晴らしい韻律を生み出している。仕事への愛、生徒への愛、そして地元富山への愛も見逃せない。早川晃央の静かなるロマンの力を見た。(伊藤 祐楓)

定刻で上野に(Maxとき)が来て富山に帰る その時が来た

\*

### 石原佳子歌集『薄紅梅』

二〇一五年から二〇二四年の作品の中から四一五首を収めた第二歌集。作者の日常を丁寧に詠まれている。特に印象深いのは人物の歌の多さである。しかし、どの歌も捉え方と描写力に優れていて慈しみやユーモアに溢れている。歌集名は高野公彦氏により「突風が薄紅梅を巻きあげて二羽の目白も花びらのなか」という一首から名付けられた。

作者は長年歌を詠んでこられたので形や調べが整った歌が多く、感性の豊かさを感じる。庭木や草花、そして大切な人達や出来事に心を寄せて詠んでいる。作者にとって歌を詠むことは、今迄もこれからも、心の支えであり喜びとなってい

ることと思う。(能勢 玉枝)

里芋の広葉をめくる風の手の白く見えつつひと日梅雨晴れ

\*

### 小島ゆかり歌文集『サイレントニヤ〜』

エッセイストとしても既に高い評価のある著者の、飼い猫をめぐるエッセイと歌を集めた一冊。主人公は十九歳になるオス猫のたますけ。思いがけず飼うことになったいきさつから同居生活の中での珍騒動が、家族模様をからめて、笑いや涙を誘う二十五篇となつてゐる。その一篇の内容はテーマを持って独立しており、軽妙な文体は読者を飽きさせない。また、単に面白いというだけではなく、それぞれのテーマの先にある広く深い思索の世界に読者を誘う。猫をめぐる他愛のないエピソードのように見えて、ふつと人間や生きるということにも思いを導かれるのだ。これは著者の歌にも通じる構造である。(桑原 正紀)

古猫のひとり遊びのあさあけのこんなやさしい日がありがとう

\*

### 吉田史子歌集『ゆふやみを漕ぐ』

二〇〇一年から二〇二三年までの作品

五〇五首が収められている。長い歌歴を持つ作者の、第一歌集である。

日常のささやかな出来事や心理を掬い取った歌、真摯に向き合い、歌った家族の歌、慈しみの心に充ちた教師の歌など歌集の歌の一首一首は思いが言葉と呼び言葉が思いを呼ぶように歌われ、余韻を残しながら心を伝える。そして何より夫への鎮魂が静かに脈打つ歌集である。

歌集名は「ゆふやみを漕ぐごとく来てくるぶしにまつはる雪の寂しさはらふ」に依る。深い心がこめられ、それが歌の美しさとなっている。（奈良橋幸子）

鉛筆の走る音のみ聞こえくるわれら家族の別れの儀式

\*

斎藤美衣歌集『世界を信じる』

三十代はじめの二〇〇七年から、およそ十七年間の作品を収める第一歌集。

三十歳の時に抱っこ紐の会社を起業した。経営者として妻として母として、日々の暮らしを詠んだ歌には深みがある。広島市に生まれ、中学生の時に大病を患いその入院中に歌を始めた作者である。原爆や生死をテーマにした作品があり、心に残る。落ち着いたトーンで、生きる

ことの寂しさ、苦しさ、楽しさなどを詩情豊かに紡ぐ。

「これからの時間を違うものとして過ごしていきたいという希望を込めました」とあとがきにある。希望を持って生きていく覚悟を感じる歌集だ。

（柴田 佳美）

右足のいつもほどける靴紐を結びながら世界を信ず

\*

斉藤 梢歌集『青葉の闇へ』

東日本大震災から十三年。あの日の記憶を近づけたり遠ざけたりしながら、こみ上げる思いに忠実に言葉を添わせて詠む。『遠浅』に次ぐ第三歌集。四五五首。

タイトルは寺山修司の評論集『書を捨てよ、町へ出よう』に触発されたもの。書の言葉は深く味わい心に沈めたのち、いったん本は書棚に戻して何も持たずに町へ出る。「町」とは即ち「青葉の闇」。そこで出会う様々な景物の中に、言葉にされることなく埋もれてしまった深い悲しみを見る。作者は震災の当事者が表現できなかつた無念を、少し遠くの位置から詠い残そうとしたのだらうか。自らのために上梓した歌集でありながら、強い使

命感を感じる。（朝比奈美子）

生協の個人宅配カタログに載り続ける数珠とらふそく

\*

小島ゆかり歌集『はるかなる虹』

二〇二四年新春まで、約三年間の四六八首を収める第十六歌集。家族、老い、戦禍に苦しむ子供、犬や猫等を、磨き抜かれた手法で詠む。反戦を祈る心が届かない悲しみを詠み、タイトルに採った〈反戦ははるかなる虹見えながら指さしながらだれも触れず〉。

自分の心と言葉との乖離、自分の言葉と世の中の言葉との乖離という「言葉への不安」及び、「情報社会への不安」が底流をなす。しかし、自分の言葉を感じ更なる高みを目指して、ITや科学の用語、新語、若者言葉、ユニークなオノマトペ、破調等も使い熟した挑戦を続けている。その内の時間的かつ空間的にスケールの大きな一首を掲げる。

（中津川勲坐）

パルテノン神殿を空は記憶して量子コンピュータの世界を照らす

（関連記事は一六〇頁に掲載）